

八木重吉の短歌(一)

西村成樹

一、はじめに 短歌の背景

明治三十一年（一八九八年）二月九日に生まれた詩人八木重吉は、昭和二年（一九二七年）一〇月に結核で二九歳の短い生涯を閉じたが、死後には数多くの詩稿が残された。そして、重吉が生前、刊行を企てたのは第一詩集『秋の瞳』（大正一四年八月、新潮社）と第二詩集『貧しき信徒』（昭和三年二月、野菊社）のみである。『秋の瞳』は生前に刊行されたが、『貧しき信徒』は再従兄の加藤武雄が生前の重吉の依頼を受けて、重吉の死の後に刊行したものである。右の二つの詩集はさほど評判を呼ばなかったが、重吉没後にその詩を愛好する人々の手によって、『八木重吉詩集』（加藤武雄・草野心平・佐藤惣之助・八木とみ子・三ツ村繁蔵・山本和夫編集、山雅房、昭和一七年）、『八木重吉詩集』（草野心平編集、創元社、昭和二三年）、『定本 八木重吉詩集』（吉野秀雄ほか編集、彌生書房、昭和三三年）などが刊行されて、そこには未刊詩稿からも作品が収録されて、重吉の詩の評価は高まっていた。

一方、八木重吉は短歌の創作も行っている。重吉は生前歌集の刊行はしておらず、またその作品の多くは結婚前後の日記の中に書き付けられている。

本稿では、あまり焦点の当たらない八木重吉の短歌の紹介・考察と彼の文学上での位置づけを行いたい。現在八木重吉の短歌は『八木重吉全集』（昭和五七年、筑摩書房）の第三巻の「日記」、「歌稿断片」、「島田とみ宛書簡」で読むことができる。短歌のほとんどは日記の中に含まれており、田中清光氏は『詩人八木重吉』（麥

書房)の中で日記について、

日記について紹介すると、大学ノオト三冊に、大正十年九月二十一日から書きはじめられ、十二年六月五日で閉じられている現存する重吉唯一つの日記帳なのである(稿者注、『八木重吉全集』の「日記」には大正十一年七月九日までしか収録されていない)。内容は短歌、詩、散文によって記され、結婚前の分量が膨大である。

と説明している。

短歌の創作時期は、のちに妻となる島田とみとの出会い(大正一〇年三月)後の九月頃から、とみとの結婚(大正十一年七月一九日)後まもなくまでの期間である。これは重吉が御影師範学校の教師として赴任した直後の約一年の期間である。この時期は重吉の文学の習作期に当たる。

《ただし、習作期はこれよりも以前からであると推定されている。『八木重吉全集』(筑摩書房)第一巻の解説で田中清光氏は

じつは学生時代(稿者注、神奈川県師範学校ならびに東京高等師範学校在籍時代。明治四五年四月から大正一〇年三月まで。)にも短歌や詩の習作を試みていたとみられるのであるが、生家の焼失等のことがあり、現在では詳しい実証は難しい。

と書いており、御影師範学校教諭以前の重吉の学生時代も短歌や詩の習作期であったろうと推測している。》
また、同書の第三巻解説には

新しい家庭をもった重吉は、結婚後わずかの間短歌を書いただけで、詩作一本に移行してゆく。

とあり、短歌が短期間しか書かれなかったことを指摘している。短歌が日記に書き付けられており、刊行の準備もなされていないということは、それらが高い文学意識でもって書かれたものではなく、プライベートな心の記録としての意味合いが強いことを示している。

さて、短歌の書かれた、作者の背景を『八木重吉全集』（筑摩書房）の年譜等によつて簡単に触れておくと、八木重吉は明治四五年四月、一四歳の時に鎌倉の神奈川県師範学校に入学した。大正四年、一七歳の時には日本メソジスト鎌倉教会のバイブルクラスに行き、また師範学校内の詩の会に加わつていたといわれている。大正六年三月、一九歳の時には神奈川県師範学校を卒業して、同年四月に東京高等師範学校文科第三部英語科に入学した。大正七年には『透谷全集』を読んで感動し、北村透谷未亡人ミナを訪問している。また、小石川福音教会のバイブルクラスに行つたといわれている。大正八年三月、二二歳の時には駒込基督会の富永徳磨牧師によつて洗礼を受けている。その後、駒込基督会からは離れていくものの、終生熱心なキリスト教主義者であつた。大正一〇年三月、二三歳の時、東京高等師範学校卒業間際に一週間島田とみ（当時一六歳、明治三八年二月四日生まれ）の勉学の指導をしたことにより、とみに激しい恋情を抱く。とみは新潟県出身であつたが、大正五年に父が死去したあと、兄夫婦と上京し、女子聖学院に通つていた。しかし、病弱で休学したため、女子聖学院三年級の編入試験の受験勉強をしていた。そして、縁あつてたまたまその面倒を見てやつたのが重吉であつた。とみは勉強の甲斐あつて合格する。一方、重吉は出会いの直後の大正一〇年四月、兵庫県御影師範学校に英語教諭として赴任する。とみへの思いはますます強くなり、同年夏ごろには東京高等師範学校の先輩内藤卯三郎にとみとの結婚の仲介を依頼する。翌大正一一年一月にはとみとの婚約が成立している。その際、結婚は二年後のとみの女子聖学院卒業後と決められたが、同年五月ごろとみが肋膜炎を患うと、重吉はとみを四年生で中途退学させて七月に結婚している。短歌はこのような重吉の生活状況（とみとの出会いから結婚まで）を背景として書かれている。内容はとみへの恋情とその懊悩が大半であり、その他は教員生活への嫌悪感・挫折感、キリスト教への信仰心、日常生活（身辺雑記）、自然の叙景などである。短歌の数は約九〇〇首である（ただし、短歌か短詩か判別しがたいものもある）。

二、教員生活への嫌悪

さて、『八木重吉全集』（筑摩書房）第3巻では日記は、

「日記1」（大正一〇年四月二四日～大正一〇年五月一日）、

「日記2」（大正一〇年九月二一日～大正一〇年一〇月三二日）、

「日記3」（大正一〇年十一月三日～大正一〇年一月二五日）、

「日記4」（大正一〇年一月二五日～大正一一年六月五日）、

「日記5」（大正一一年六月六日～大正一一年七月一四日）、

「日記6」（大正一一年七月四日～大正一一年七月九日）

というように1から6までの番号を付して整理されている。このうち「日記1」と「日記6」には短歌が含まれていない。短歌が登場するのは「日記2」の冒頭からである。その冒頭部分の短歌には教員生活への嫌悪感・不満が歌われている。その中の幾つかをあげてみる。便宜上、短歌に番号を振っている。

1、あまりにもうるほひしらぬ教へ子の

ひとみにけふもかほをそむけし

2、わがおもひかたらんとして

あまりにも夢なき子らにもだしてやみぬ

3、愛すべきねがいを祈りもとむれど

毛虫のごとも子らのきらわる

4、われはしも夢みる子かや

おしへ子のにごれるひとみまもるにたえず

5、かの子らに哀しき夢のありたらば

われなりわひに嘆かじものを

(以上大正一〇年九月二一日)

重吉の短歌は石川啄木の影響^{註2}で二行にも三行にも分けられている。また、詩と同様に仮名表記が多い。^{註3}これらの作品には受け持ちの生徒に対する嫌悪感が直接的に表出されている。一般的に教育者は生徒への嫌悪感を注意深く隠すものだろうが、日記というプライベートな記録の性質上、ありのままの生々しい本音がここに書きとめられている。「うるほひしらぬ教へ子」、「あまりにも夢なき子」、「おしへ子にのこれるひとみ」は生徒への露骨な非難である。2の短歌には《自分の思いを語ろうと思ったが、あまりにも夢のない生徒に、言っても理解してもらえないと思って、沈黙してしまった。》と書かれている。5の短歌にも生徒には夢がないという趣旨が述べられている。重吉の考える「夢」や理想がどのようなものかは具体的には分からないが(キリスト教的理想世界か)、ここには青年教師重吉の理想と現実の隔絶に苦悩する姿が描かれている。沈黙してしまったという行為は生徒に向き合わない、消極的・内向的な態度である。1の短歌の教え子に顔を背けるといふ態度も同じである。3の短歌の「毛虫のごとも子らのきらわる」には生徒が毛虫にたとえられており、蔑視がはなはだしい。

このような生徒に対して見られる嫌悪感、蔑視は同僚の教員にも向けられている。

1、税金のこのみいつも口にする

ひとありげにも教員らしき

2、借り家と米の相場がいとおもき

教員室の話題なりける

3、なにごとにやにやわらひ用のすむ

教員といふはひとのくずかや

(以上大正一〇年九月二一日)

1と2の短歌は教職に対する情熱や理想がなく、自己の生活・身近にしか関心のない同僚教員への失望を表した

ものだろう。3の短歌は作り笑い、愛想笑いで物事をやりすぎず教員を「人のくず」と呼んでいる。重吉の妻とみはのちに、学校での重吉の様子を次のように書いている。

重吉はよく勉強するまじめな親切な青年教師だったと、こんにちでも教え子のかたたちが語って下さいますが、学校では教員室の俗悪な会話にみちた空気をひどくきらい、ひまさえあれば、ひとり校庭の木蔭や物蔭で、聖書に読みふけていたようです。

『花と空と祈り 新資料八木重吉詩稿』の「編輯後記」 吉野登美子

ここには教員室の雰囲気嫌う重吉の姿が述べられている。このような他者に対する「くず」や「毛虫」という激しい軽侮の言葉は、重吉の自尊心、気位の高さを示すものである。内向的でおとなしいと言われる重吉の内面、心の底にはこのような激しい感情、自恃が潜んでいることに注意する必要がある。軽々しく他人を侮る自己に辟易するからこそ、いつそう信仰の道へと進んでいったのではないだろうか。

そして、他者への非難はすぐさま、自分は果して他者を非難できる立派な人間なのかという問いかけを生み出す。

1、おしへ子のみにくさせむるみづからが

きたなきものゝうつわなるらし

2、われといふうつけしものがあやまりて

おしふることをなりわひとする

(以上大正一〇年九月二二日)

3、偽善者の八木めが今日もさかしらに

教壇にたちて世迷ひをとく

4、英語といふくだらぬもののなかりせば

かくまでわれも墮落せじもの

(以上大正一〇年九月二二日)

1は教え子を責める自分こそが汚いものの器だと自己反省、自己批判している。2は自分のような愚か者がまちがって教職についているという自己批判、嫌悪感である。3は教壇に立つ自分を偽善者だと非難している。人間の模範となるべき教員の仮面をかぶっているかのような自己への嫌悪感だろう。4は英語に興味をもったばかりに、英語教師になってしまったという後悔である。これらの自己批判の短歌からは、重吉の内省的な心理傾向がよく分かる。また、東京から関西に赴任して、教職に適応できずに苦悶する新人教員重吉の姿が浮かび上がってくる。

注1、今高義也氏は八木重吉とキリスト教との出会いについて次のように指摘している。

まず注目すべきは、重吉の鎌倉師範（稿者注、神奈川県師範学校）入学後間もなく始められた、師範学校内における「バイブル研究会」である。日本メソジスト教会の「年会」の記録は、次のように伝えている。

鎌倉教会（中略）

近年の一美挙と云ふべきは、鎌倉師範学校内に於けるバイブル研究会なり。ドレパル博士ら其の責に任じ、毎週一回交互に宣教師諸君の出演あり、出席の生徒八十名前後なりと云ふ。近來稀に見るべき模範的の挙なりと云ふべきなり。将来諸学校の教師たるべき性質を有する生徒の心に、深く聖意注ぎ入れられんことを祈りて止まざるなり。

『日本メソジスト教会第六回東部年会記録』、一九一三年三月

公立の師範学校内におけるこの「バイブル研究会」の開催は、当時の日本メソジスト教会にとつてのみならず日本社会を見渡しても実際「稀に見る一美挙」であつたに違いない。（略）／この「バイブル研究会」に重吉が参加していたかどうか現在のところは確認できない。しかし、この「研究会」の開催が、重吉が後に日本メソジスト教会鎌倉教会（略）におけるバイブルクラスへ出席する契機の一つとなつたことは十分考えられよう。

（『八木重吉とキリスト教 詩心と「神学」のあいだ』教文館）

注2、重吉の短歌は形式の上からも、生活に根ざすという発想の上からも、用語の上からも石川啄木の影響が見られる（他には若山牧水や与謝野晶子〔明星調〕の影響が見られる）。左に啄木の影響の濃いと思われる、重吉の短歌を挙げておく。

死ぬるにはいづれがやすき

かくとへばピストルはよきものなりといふ

(日記3) 大正一〇年十一月一日

いつしんにでんきのかさを

みつめける おもひつくれば

またあめきこゆ

(日記3) 大正一〇年十一月二日

ひとがみな

なつかしき日かなよくよくに

あきらめはてしそがゆえなりや

(日記3) 大正一〇年十一月二四日

まつちすりやがて火消えぬ

白き灰そのまゝにのこりてありしかな

(日記4) 大正一一年五月二日

一握の砂にてもよし

さばかりのちさきにてよし、「真実」よあれや

(日記4) 大正一一年六月五日

また、田中清光氏は重吉の読書範囲に石川啄木の歌集が入ることを指摘している。

因みに重吉の実家には、加藤武雄が新潮社へ入社してから贈ってきた文芸雑誌や、トルストイ『戦争と平和』、ツルゲネフ『獵人日記』、ゲーテ『若きエルテルの悲み』、志賀直哉『天津順吉』、若山牧水、石川啄木、金子薫園の歌集などがあり、長兄政三は短歌を愛好していたと純一郎氏(稿者注、重吉の実弟)は回想する。重吉の読書圏にこの生家の蔵書が入ることはいうまでもない。

注3、

短歌ではなく、重吉の詩の仮名表記についてであるが、鈴木亨氏は次のように指摘している。

(『詩人八木重吉』 麥書房)

彼の好んだ仮名を主体とする表記法も、遠い誘因は賛美歌集にあったかもしれないが、直接には白秋、暮鳥と

いう先縦に学んだものだろう。

（『八木重吉の人と作品』『八木重吉詩集』白鳳社。引用は『八木重吉文学アルバム』筑摩書房によった。）
注4、重吉の性質について、従兄弟の八木亀助氏は「故人のこと」（『草』3号八木重吉追悼号）という文章で

氏とは二年違ひで小学校もずつと一しよだつた關係上、お互ひに鼻たらし小僧時代からの追憶はそれからそれへと尽きないけれども、そのどの一頁を開いて見ても先づ頭に浮かんで来るのはおとなしい内気すぎる様な、さうして色白な、いかにも坊ちやんらしい姿である。遠くもないが都離れた山村のことである。多くは小倅か餓鬼共といふ感じの小童ばかりのうちに氏のみには坊ちやんといふ言葉がふさわしく思はれた。それは一つには氏の家庭が割合に子弟を窓深く育てる方であつた為かも知れないが矢張り大部分は氏の特質の現はれたつたと思ふ。

（『八木重吉文学アルバム』筑摩書房所収）

主要参考文献

- 『詩人八木重吉』田中清光（麥書房）
『八木重吉文学アルバム』田中清光編（筑摩書房）
『八木重吉とキリスト教』今高義也（教文館）
『詩の宇宙 重吉 暮鳥 元吉 賢治』藤原定（皆美社）
『日本近代詩とキリスト教 佐藤泰正著作集10』佐藤泰正（翰林書房）
『日本の詩歌』中原中也 伊東静雄 八木重吉 伊藤信吉他編（中央公論社）
『日本詩人全集』中勘助 八木重吉 田中冬二 亀井勝一郎他編（新潮社）
『花と空と祈り 新資料八木重吉詩稿』吉野登美子他編（彌生書房）
『琴はしずかに 八木重吉の妻として』吉野登美子（彌生書房）
『八木重吉 詩と生涯と信仰』関茂（新教出版社）
『八木重吉詩がたみ 祈り』四竈経夫（宝文館出版）